未来のために私たちが、今できること

自分たちの住む地域で少子高齢化が進んでいることは知っている。住む地域を守るため、行動を起こさねば！ここでは、そんな思いを持って取り組んでいる地域や団体をご紹介します。

鉈打ふるさとづくり協議会

会長　寺　政孝さん

鉈打地域には、地域への危機感を持った有志で立ち上げた「鉈打ふるさとづくり協議会」がある。当初は、地域にある資源を活用し、地域おこしをすることから活動を始めた。年間6万人（ピーク時）が訪れていた「藤瀬の霊水」に目をつけ、「藤瀬霊水公園」を整備。その後、住民の気運も高まり、定期的に開催できていなかった郷土芸能祭に、なたうち茶屋まつりも加え、交互に定期開催するようになった。「地域の危機感」が住民に共有されたのである。

また、これからの動向を知らなければ対策もできないとアンケートを実施。その結果から、七尾市よりもいち早く取り組んだ空き家対策や、鉈打米のブランド化を進め、農家の収入向上対策を実行した。さらに、平成22年に地域住民の参画によるＮＰＯ法人なたうち福祉会を立ち上げ、高齢者の病院への送迎や買い物代行、安否確認などを積極的に行っている。

寺政孝会長は「危機感を感じれば話し合いが生まれ、地域課題の意思統一が図られる。そして、打開に向けた第一歩が踏み出される。そう考えると、常日頃の話し合いの場が大事。今後を託す担い手も見つかったので、末永い活動を続けられればと思う」と、鉈打地域に希望が見えていることを語ってくれた。

南大呑地域づくり協議会

地域づくり専門員　前田　忠さん

南大呑地区は、市内の中でも、少子高齢化や人口減少が著しい地域。そのため、住民相互の連携や協力体制がとれる地域づくりをいち早く目指し、市内で一番早く地域づくり協議会を立ち上げた。

そして、協議会でもっとも奮闘して活動するのが前田忠さんだ。「少子高齢化や人口減少の問題は、地域で解決できることではないけれど、地域でできることは、やらなければならない。福祉や防災の分野で、私たちに何ができるだろうかと考え、一歩一歩進めている。高齢者が多い地域に、もしものときに何が必要かを考えた時、町会ごとの防災マップが必要と考えた。消火栓や避難場所など、地域をくまなく調べ、町会ごとの防災マップを作成し、全世帯へ配布した」と、常に地域のことを考える姿勢はさすがだ。

柳浦勝会長は「地域づくりに関する専属の職員がいることは、本当にありがたい。新しいことを生み出すことが難しいこの地域で、積極的に活動してくれる前田さんには、感謝ですね」と、その期待も大きい。

前田さんは「これまでにいろいろなことができたのは、住民の皆さんの協力があるから。本当にありがたい」と話す。

地域や人と人とのつながりを考えながら、今後も地域の原動力となっていくことだろう。

すみれ会

代表　川田　武子さん

「すみれ会」は、旧能登島町の時に始まった、高齢者世帯へ配食サービス用の弁当づくりをする有志団体。会員数50人を誇り、今でも月に2回、継続して高齢者世帯のための弁当40食を作り続けている。高齢者からの味の評判は良く、配食サービスを心待ちにしている高齢者は少なくない。会員たちも、期待に応えようとやりがいを感じて活動をしている。

そして、平成26年6月から能登島地域づくり協議会が企画した「のとじまコミュニティカフェ　ごはん処　島のいっぴき」の事業で、運営面での中心的役割を担う活動も始めた。

この事業では、毎週土曜日、廃園となった向田保育所を利用して、ほぼ能登島産の食材で作った食事を提供。特に高齢者が家に閉じこもらず、その場で楽しいひとときを過ごしてもらう憩いの場を提供するのが狙い。また、能登島地区以外の人も自由に食事をすることができる。能登島を訪れた観光客は「懐かしい味。昔、こんな料理を食べたよね。今では、ひと手間かけた料理を食べることがなくなったよね」と、手の込んだ料理に話題が広がり、旅の思い出の1ページに一役買っている。

代表の川田武子さんは「皆さんの家で作った野菜などを持ち寄ってやりくりしています。大変やけど、喜んでくれるからうれしいわいね。私たち会員の生きがいにもなってるよ。元気な限り、地道にこの活動を続けていくけれど、私たちももうすぐ提供される側になるからね。次の課題は引き継ぐ担い手が育ってほしいね。そうなれば、能登島になくてはならない拠点となるはず」と胸の内を明かしてくれた。

いくつかの課題はあるものの、「すみれ会」は、地域や人と人とをつなげる能登島の大きな存在となっていることは言うまでもない。

ＮＰＯ法人　ぽっかぽか

理事長　滝　恵美子さん

「ぽっかぽか」は、平成18年に設立。子どもたちが健やかに育つ環境と、親が安心して子育てができる地域社会づくりを目指して「親子ふれあいランドあい・あい・あい」の施設を中心に活動している。現在のスタッフは28人。保育園を退職した保育士や栄養士、調理師や介護ヘルパー、そして壊れたおもちゃを修理してくれる人など、いろいろな資格や技術を持ったスタッフで活動している。さらに、ほとんどのスタッフはボランティア。皆さんは「子どもたちのために」を合言葉に、善意で運営に協力してくれている。

「少子化で子どもが減っているからといって子育てが楽な環境になっているわけではありません。地域の変化や、昔と違った問題が生まれ、複雑化しています。地域や人と人とのつながりが希薄化していく中で、私たちができることは何かを考えて取り組んでいます」と話すのは、責任者である滝恵美子理事長。

平成18年に、七尾市にしかない子育て支援を求め、おもちゃ図書館を始めた。おもちゃ図書館とは名の通り、おもちゃの貸し出しをすること。子育てが終わった家族からおもちゃを譲り受け、おもちゃが必要な子育て家族へ貸し出すという、理にかなった取り組みをしている。そして、壊れたおもちゃを修理する取り組みなども行い、親からの評判は高い。

夫の仕事で、各地へ転勤するお母さんからこんな話を聞いた。「いろいろな場所で生活しましたが、雰囲気がよく、料金も手ごろで、土日も利用できる施設はこれまでなかったですね。また引越しするかもしれないがせめて小学校に入学するまでは七尾で生活したいですね」と。

滝理事長は「高齢化が進む中で、高齢者に対する見回りや配食サービスなどの取り組みが進んでいますが、子育てに対する取り組みが進んでいないように思えます。ぜひ、地域で少子化に向き合い、支え合う環境になってほしいですね」と切実に話した。